

能性をみた。グリーンツーリズムは、「都市住民へのゆとりある休暇」と定義されるが、グリーンツーリズムが提唱されて数十年、現在は、む

しろ「地域を元気にするもの」「まちづくり・まちおこし」としての役割が大きいといえるだろう。

奥多摩地域シカ食害の現状と課題 地元インタビューと23区意識調査を踏まえて

萩原 あずさ

野生動物は人類の共有財産であるという考え方が、生物多様性条約などによりグローバルな共通認識となりつつあるが、一方で野生動物と人間生活との軋轢も大きくなっている。日本全国での野生動物による農林業被害は200億円を超えるといわれる。そのなかでも、1990年代以降、シカの食害が急増している。

東京都においても、平成16年7月、奥多摩地域のシカによる森林破壊がクローズアップされ、本年9月、東京都は初めてシカを対象動物として、鳥獣保護狩猟法にもとづく特定動物保護計画を策定した。これによって、囲い柵や防除ネットの設置などに加えて、現在生息が推定されている2000頭のシカを平成20年度までに400頭に削減するという大規模な個体数調整に舵が切れ、シカ狩猟の緩和と管理捕獲の実施が宣言された。

本稿では、まず、日本での農林業被害、シカの生態を概観したうえで、奥多摩地域のシカに焦点を絞って、その生息実態、農林業への被害実態、捕獲の状況を明らかにした。続いて、奥

多摩地域の森林の再生とシカとの共存を目指して策定された「東京都シカ保護管理計画」のワイルドライフ・マネージメントの理念とそれに基づく具体的な対策を分析した。

それを踏まえて、筆者が独自に実施した奥多摩町長をはじめとする地元関係者へのインタビューと23区住民意識調査を報告した。そこから見えてくるものは、世界都市として繁栄を続ける大都市東京の片隅で進行する過疎と高齢化、林業の衰退、個体数調整の担い手である猟友会の疲弊、科学的な生息数調査の重要性と困難さ、奥多摩町が観光の起爆剤と考える食肉化事業の前途多難、そして、奥多摩地域の森林とシカ食害についての無関心であった。

豊かな森の象徴として親しまれてきたシカが、奥多摩地域で真に人間社会と共生していくためには、都民が当事者意識をもって、東京の水源を育む森林のあり方を考え、モニタリングによる検証を前提としている「シカ保護管理計画」の今後を注視していくことが必要である。

メイド喫茶から眺める秋葉原の変化 —アキバ、メイド喫茶ブームをめぐって

長谷川 未来

近年オタク文化が注目を集め、「アキバ系」「萌え」といった言葉がメディアでも大きく取り上げられる「オタクブーム」が起こっている。かつては日本一の電気街であった秋葉原は、現在では日本一のオタク街としての方が名高く、ブームの波を受けて街の様相をめまぐるしく変えている。

オタク街としての秋葉原を語る言説の中で必ずといって良いほど取り上げられるのが「メイ

ド喫茶」だ。かつてはオタク層を対象としたマイナーな存在であったメイド喫茶は、いまや外国人客も訪れる程の観光名所となっている。ブームの盛り上がりとともに秋葉原は観光地化し、メイド喫茶にはガイドブック片手の一般客が押し寄せさながら観光名所の扱いを受けている。メイド喫茶自体がここ数年で出来た新しい文化であるにも関わらず、その認知度はいまや一般層にまで広まっているのだ。この波を受けて秋

葉原には続々と新たなメイド喫茶が誕生した。メイド喫茶各店はブームに乗ってメディアに迎合する店、独自路線をつらぬく店とそれぞれ生き残りをかけた経営戦略を採っている。

また飽和するメイド喫茶市場は新たなビジネスチャンスを求めてメイド喫茶はリフレクソロジーなど新たな業種への発展、ウェイトレスの芸能活動など飲食店の枠に収まりきらない様々

な形へと発展していった。

このブームがいつまで続くのかは分からない。だがブームがメイド喫茶に与えた影響を読み解くことで、秋葉原という街の変化を一側面から見ることはできるのではないかと考え、本論文では主に秋葉原のメイド喫茶に焦点を絞って、一つの流行が都市にもたらす影響について概観していく。

六本木六丁目の再開発と街の変化

藤井 歩

2003年に完成した六本木ヒルズ。この頃の開発ラッシュで唯一既存の街並みを解体し、新たな街をその上に形成した、民間が手掛けた大型都市開発である。そもそも六本木ヒルズは森ビル社長の森稔が理想とした、一つのエリアに居住地、職場を含め居住空間が至近距離に位置する街、時代の先へ行く「文化都市」を目指して造られた街である。その甲斐あってオープン直後の調査では、都会的、大人の雰囲気など、森稔の描いた通りの印象を来客者たちは抱いている。

また、六本木ヒルズが完成したことにより、マスコミの六本木への対応が変化した。取り上げられる内容もかつてのものとだいぶ変化し、風俗関係の情報は格段に減少している。逆に、

デートスポットや企業の情報が増加している。それは、六本木という街に対しての人々の関心に移り変わっていることを示している。大きな街が一つできたことにより六本木という街全体の関心と印象を変化させていると考えられる。

街並みの変化についても、六本木ヒルズ建設の影響がうかがえる。飲食店の分布では、飲食店が散在していた着工前と比べると、六本木ヒルズの周辺に集中して展開している事がわかる。更に、地価も六本木ヒルズを中心としたエリアのみ上昇傾向にある。六本木という街が、六本木ヒルズを中心として、人の流れだけでなく、印象、街並みを含めて全体的に変化させていると言える。

現代猫論 —地域猫活動の何が問題か—

松下 奈々

ペットの地位上昇とペット産業の華々しさの裏で、行政に寄せられる野良猫に関する苦情は微増傾向にある。この傾向は東京など大都市圏で特に顕著である。その状況下で、野良猫の問題に関してここ10年で大きな変化があった。それが地域猫活動の広まりである。

現在飼育されている猫は、エジプト人がリビア山猫を飼いならしたことを起源とする説が有力だ。猫はエジプトからイスラム世界へ、ヨーロッパへ持ち出され、16世紀にはヨーロッパからアメリカ

へ持ち出された。東洋においては、インドに古くから家猫がいた記録が残されている。インドにいた家猫は仏典と共に中国へ渡り、さらに日本へと渡った。平安初期、猫は外国からの珍奇で美しい生き物として、高貴な人々にペットとして大切にされた。猫は殖え、最初に比べると貴重なものではなくって、一般に広まっていた。また、次第に気味悪いものとしても見られるようになり「猫股」伝説が生まれた。江戸時代には生類憐みの令など猫優遇政策がとられ